

「主体的再編成」の交錯構造

愛媛大学 岩 谷 三四郎

「村落生活の変化と現状」を「主体的再編成」の面から考える視点は、時宜を得ている。その動きが各地さまざまな形で始まっているだけでなく、最近の政策さえ、その動向に期待をかけ始めているからだ（例えば農林省の地域農政特別対策事業）。

しかし、「主体的再編成」の社会構造は複雑であり、その煮詰め方次第が大会の成果を左右するだろう。

〔問題1〕 農民層の分化・分解と混住社会のなかで、「再編成」の「主体」としての担い手は、どう位置づけられるのか？

農業の変化と農村の都市化が村落社会の本質とどうかかわりあっているかは、恐らく村研永続課題の一つであろう。そんな立場から諸報告が討論のなかで客観化されなければならないことはいうまでもない。

〔問題2〕 住民サイドからみた「村落生活」とは何か？

「村落生活」をどう理解するかは、昨年度大会の実質的な内容であり、本年度大会に残されている課題でもある。体制的に与えられている村落住民の生活体系と、「主体的再編成」のなかで志向している生活体系との間のズレと対抗関係。その点の解明が、村落社会固有の生活体系という概念にアプローチしてゆく一つの有力な

鍵になるように思われる。

〔問題3〕 「主体的再編成」と行政諸施策とのかわり

殆んどすべての行政施策が形式的とはいえ、その推進を主体的実行力に期待している反面、「主体的再編成」の手段の多くは、行政諸施策を利用するのが一般である。その際「主体的再編成」の動向がいつのまにか体制のなかにすっぽりと抱え込まれはしないか。すなわち、「主体的再編成」の限界についての論議が必要であろう。

私見によれば、村落社会は体制の動向とともに変化・変貌しつつも、その本質は、消滅することなく、各歴史段階にもち越され、それぞれの歴史段階ごとに特有の機能を發揮してゆくものである。その点では、村落生活を体制支配の側面からみることも、反対に主体的側面のみ注目することも、ともに一面的把握であるとみざるをえない。

村落社会および村落生活をめぐる、現段階でのそのような交錯構造が解明されることを期待する。